

<論文題目> 実践的教師論に関する哲学的考察

—「学びの共同体」論における「反省的実践家」モデルを中心に—

指導教授 森川直

岡山大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻 18 - 003 英格莫徳格

I、研究目的

経済のグローバル化、文化変容、情報社会などを背景とした学校教育の改革及び教師の資質と能力に関する議論が盛んになされている。戦後において大衆への献身的な奉仕を要求された「公僕」的な教師像から「国家主義」「産業主義」の社会を支えてきた「技術的熟達者」の教師像へと転換し、その役割を果たしてきた。しかし、民主主義の進展する反面、それによってもたらされた個人主義と市場主義が膨張しつつある。現代においては、学校と教師の存在が不透明になっている。

日本の学校教育発展の歴史から見ると、欧米諸国より 25 年も早く就学率と進学率の頂点に達していた。このような教育の急速な近代化において教育行政、学校教育制度からもたらされた弊害は日本だけではなく、中国にも同じ特徴がある。日本では、すでに 1990 年代から教育専門家が膨大な実験をし、政府の政策で様々な改革がなされた。その特徴は生徒が主体である学びを中心にし、教師の教育活動は「教え、伝達」から「支援」の役割へと転換した。「新学力観」に基づき学習内容より態度や関心を重視し、教科内容の削減や総合学習時間の導入がなされた。しかしその結果、総合学習の活動は一方向的に生徒に任せ、単なる「体験」や「活動」になってしまう傾向が見られる。教師と生徒間の「教える関係」が希薄になり、教室でのテーブルの並べ方に目を向けるような形式的な教え方を取ってしまい、「一斉教授か個別学習か」という二者択一の議論がなされた。教師が明確な目的で創造的な内容のある「共同的学習」を行うことは少ない。

今日、教師は教育の専門家として、その使命と役割、そして生徒や親との関係が問い直されている。そこで、佐藤学は、教育活動を「教え、伝達」から「対話」へ、教師を「技術的熟達者」から「反省的実践家」へ、という「学びの共同体」論を提出し、そのなかで授業を創造する主体である教師を「反省的実践家」と呼び、新しい教師像への転換を求めている。実際、教師の反省的思考に関する研究は、佐藤学の『教師というアポリア』（1997 年）によれば、これまで教師の実践的認識論によるもの及び「反省的授業」を掲げた一連の研究で、実践的経験の

反省と教師の専門的見識の形成という意味で展開された。それは、ドナルド・ショーン (Donald, A, Schön, 1931-1997) が提起した「活動における省察」でなく、授業後の反省、もしくは教育活動に関する反省に止まっているという。

本研究では、教える主体である教師に着目し、その背後にある社会的および経済的状況を考察した上で、ショーンが提起した「反省」(reflection)と「熟考」(deliberation)の意味を探りながら、「反省的实践家」モデル教師の使命と役割を明らかにしてみたい。

また、学校教育は日本も中国も中央集権的な制度の下で発展してきたのである。中国では、多くの教師は統一された教科書を用い、試験の結果や進学率に目を向ける一方、授業を創造し、評価し、実践する経験が乏しい。近年、佐藤学の「学びの共同体」論が注目された。その後、佐藤学は上海・華東師範大学を訪問し、そこでの講演は、中国の学校教育改革及び学校現場に多大な示唆を与えた。さらに、中国での実践から見た「反省的实践家」モデル教師理論の問題点を指摘し、導入する可能性を探ってみたい。以上の考えに基づいて次のように題目を設定した。

II、論文の構成

はじめに

第一章 現代社会における学校教育と教師

第1節 転換期の教育の危機

第2節 転換期の教師の危機

第3節 これからの学校への構想と求められている教師像

第二章 「学びの共同体」論

第1節 学校改革の論争から見た「学びの共同体」論

第2節 学校教育における「教え」と「学び」関係から見た「学びの共同体」論

第3節 学習集団論から見た「学びの共同体」論

第三章 「反省的实践家」モデルの教師

第1節 「反省的实践家」とは

第2節 「省察」及び「熟考」という概念

第3節 「実践的見識」至るまでの実践的思考様式とその特徴

第四章 教師像の再構築 —中国での実践と反響を踏まえて—

第1節 中国のカリキュラム改革の背景

第2節 中国における「学びの共同体」論と実践例

第3節 教師像の再構築へ向けて

おわりに

Ⅲ、論文の内容

【第一章】 現代日本社会における学校教育と教師

近代の学校と教師に着目し、それに関わる社会的及び経済的な背景を考察した上で、そこから見えてくる学校と教師の危機とこれからの学校と教師の未来像を提示する。

今日における教育の危機を考える時、その背後にある教育の近代化の歴史を見逃してはいけない。佐藤学によれば、欧米が2、3世紀かけて教育の近代化を緩やかに達成してきたのに対して、日本の学校教育はわずか一世紀足らずで、量的及び制度的な拡充の頂点に達したという。人々は身分や階級を問わず教育を受けられるようになり、学校で教育を受けることによって親世代より高い社会的地位へと移動することができた。それで、アジア諸国は急速な産業化を推進することが可能になった。他方、圧縮された近代化は社会的移動による過激な受験競争の弊害をもたらした。

また、アジア諸国の教育の近代化は、国家の主導の元で官僚主義的統制によって達成された。学校は国家体制の末端機構であり、教師は国家政策の「公僕」であった。アジア諸国における教育の目的は、国家の繁栄をさせると同時に、個人が自分の将来のために教育を受けるという利己的な個人主義にある。それが近代化の両輪になり、国家と個人のあいだにある公共圏が脱落した。

【第二章】 「学びの共同体」論

本章では、21世紀における学校改革をめぐる議論のなかで、特に注目されている「学びの共同体」論を取り上げて、これからの社会、学校そして教師に対する提言を示してみる。「共同体」の原理に基づく学校へと再構築するのが学校改革とすれば、学校教育の目的と使命は民主主義の発展に貢献する実践的・文化的共同体の構築であり、地域文化と教育の中心として学校を構想し、生徒達が学び合う共同体、教師達が専門家として育ち合う共同体、地域に人々が異質な文化を共有し合う共同体として、学校を再構築する。「学びの共同体」を再構築するためには、以下のとおり具体的な提示がある。

まず、教室での学びを、個々の経験を基盤とする共同体的な実践へと再構成する活動に

において推進する。特に、個人主義的な学びから共同体的な学びへと転換することは中核的な課題である。教師と生徒の関係は、これまでは教師中心の「教える」ことだったが、これからは、教師も生徒も文化的実践に参加することによって「ともに学びあう（と同時にともに教えあう）」という関係を構築することである。

次は、学校に対して自律的な「専門家組織」へと再組織することを要請する。「専門家」とは、科学的な理論や技術に習熟した「技術的熟達者」としての専門家ではなく、複雑な問題状況に対する「省察」やその経験の反省に基づく「実践的見識」を行使する「反省的実践家」の専門家を意味している。「反省的実践家」としての教師は、学校の中で専門家の協同を実現すると同時に、学校外でも専門家や教育行政の担当者との協力関係を構築することが求められている。

【第三章】 「反省的実践家」モデルの教師

本章では、「学びの共同体」論における「反省的実践家」の重要な概念である「省察」(**reflection**)と「熟考」(**deliberation**)の由来とその思考様式について考えてみる。佐藤学によれば、実践的知識と実践的思考様式がどのような性格を持ち、どう形成され、どう機能しているかに関する研究は、ここ数十年のことである。「反省的実践家」の実践は、予め準備された科学的技術、理論的知識の適用ではなく、その経験と反省を通して実践的な知識や見識が形成され機能する領域なのである。問題状況に対する「省察」と「熟考」という二つの実践的な思考によって、理論的な概念や原理を実践の文脈に即して実践的見識が形成されるという。

そのなかの「省察」の概念は、デューイ (**John.Dewey,1859-1952**) の著作『思考の方法』(**How we think,1933**) の中にその源を見出すことができる。デューイによると、「省察」とは、思考の一つの形態であるが、他の理論的な思考形態とは異なる特徴を持っている。それは、実践状況に直接関わる経験の中で生じるためらいや困惑、疑念を解決するために教師が自らの経験を重視し、信念や価値など既存の知識について積極的に、持続的に一貫して注意深く考えることである。そしてその「熟考」のために、即興的行動を一時的に停止して思考することが「省察」である。「省察」の過程は何が問題であるのかを明らかにする。そして、問題解決という目的に照らして手段としてどの授業行動がふさわしいかということ仮説とし、あれこれ考えめぐらせる手段—目的分析を行い、それを実際に検証していく探究の過程である。

実践における様々な状況に応じながら、専門家が瞬時の内に考え振舞うこと、ショーンは「行為の中の省察」と呼ぶ。その中に、ショーンは、行為するためにいったん立ち止って考えるというより、むしろ行為と思考がきり離せないことを強調するために、「行為についての省察（**reflection-on-action**）」と「行為における省察（**reflection-in-action**）」とを区別し、行為に埋め込まれた形で働く思考である「行為における省察」を強調する。「反省的实践家」の思考の特徴は、自らの行動と結びついた思考であり、思考様式のみを取り出すのではなく、何についての思考であるかという思考の対象となる素材（**stuff**）と分割することの出来ない思考である。そして、行為しながら思考することと、行為後に意識的にその行為を思考する関係が行為と思考の関係として成立し、この両者は循環的に螺旋的なプロセスで行われていくのである。

先ほど説明したように、「反省的实践家」が活用している知識は、決して活動過程における認識の「省察」と実践経験からの反省だけではなく、「省察」と並行して、もう一つの思考活動「熟考」が機能している。「熟考」とは、理論的な概念や原理を実践の文脈に対応させて翻案する思考であり、実践的な問題の解決に向けて多様な領域にわたる諸理論を総合し取捨選択する思考でもある。「反省的实践家」の授業と学習は、教育学と心理学の範疇を超えており、人文社会諸科学のほぼ全ての領域の理論的知識が関与するものとなる。

以上に述べたように、「省察」と「熟考」の二つの実践的思考によって、問題解決の過程における理論と実践の相互作用を実現している。この「省察」と「熟考」という二つの実践的思考の能力を教師の「実践的見識」と呼ばれる。それを教職の専門性の基礎と見なししている。

【第四章】教師像の再構築 —中国での実践と反響を踏まえて—

前章で述べたように、佐藤学の「学びの共同体」論の中心となる「省察」と「熟考」という概念を探ったが、本章では、中国のカリキュラム改革の歴史を概観し、中国における「学びの共同体」論の受容を考察する。2000年に新設した探究性学習カリキュラムが順調に進行しつつあり、そのなかで、教える主体である教師の資質と能力が問われている。

21世紀における教師は、教育に関する専門知識だけでなく、人文諸科学を身につける必要がある。知識の権威を代表としてきた教師から「中間的存在」へと転換し、科学的原理を適用して、「技術的熟達者」から「反省的实践家」へと変身しなければならないと私は思う。

教師は自身の教職経験や様々な知識や実践などに基づいて、目的に合わせるような授業

法を選び、様々な仮説を考えながら教材を作り、創造的な授業に取り組んでいかなければならない。また、授業活動における生徒の状況と対話しながら、教師は瞬時にどう対応するか、生徒にどうふるまえばよいかを判断し、行動しなければならない。

実践的思考のプロセスは、何が問題かを省察し、その問題を解決するために教師自身が既知の知識を再解釈し、多様な視点から多様な諸理論を取捨選択し、総合することである。実践状況に直接関わる経験のなかで、問題を解決できるような反省的实践家になるためには、教師は自らの経験を重視し、信念や価値などの知識を、積極的に、継続的に注意深く考えるしかない。しかも、教師が一人で自分の授業のなかに閉じこもって研究するだけでは反省的实践の教師になることが難しい。教師は自分の授業を公開し、他の教師や親の協力を得て、常に生徒の現状に向き合い、教育活動を行う必要がある。

中国では、佐藤学の「学びの共同体」論が翻訳されて以来、かなり注目され、反省的实践の教師の重要性への認識が高まっている。しかし、現場で教育を実践している教師達はどのぐらい「省察」と「反省」を意識し、教育活動を行っているのかは明らかにされていない。「反省的实践家」のような教師はこれから必要だという指摘は中国の教師に関する著書や論文などでよくなされるが、教育実践をしながら反省的な思考活動を行っている教師はいまだ少ないのが実情である。「反省的实践家」の鍵になる「省察」と「熟考」の実践的思考の概念に関する理論的な研究は、具体的な事例は少なく、まだ十分に展開されていないと思う。「反省的实践家」の本当の意味とは何かを理解しなければ、教師は教育活動において、「省察」と「熟考」がどう行われているのかを意識しないまま授業を済ませてしまう恐れがある。今の中国は、教育改革を実施し、大きな発展を成し遂げていると言われるが、都市と農村の格差、教育に関する設備、資金、政策など難題が山積している。「教師とは何か」、「反省的实践はどういうことなのか」への哲学的な問いの探究は、いかなる教育環境や状況に置かれていても教師がなすべきことだと思う。

おわりに

本研究は、今日学校教育に関する学校批判と教師批判の中で、教える主体である教師に注目し、それらに関わる社会的な状況を踏まえて、ドナルド・ショーンが提起した「省察」と「熟考」の意味を探りながら、新しい教師のモデル「反省的实践家」の使命と役割を明らかにしてみた。

教師に関わる諸問題の解決については、佐藤学が提唱した「学びの共同体」論が一つの示

唆を与えてくれた。つまり、教師が地域の人々、親たちと協力し教育活動に参加して、共に成長する学校を建設しなければならない。教師は自ら教材を研究し、授業の複雑な問題状況に対する「省察」と「熟考」の二つの実践的思考によって「実践的見識」を行使する「反省的实践家」のような教師でなければならない。

佐藤学の「反省的实践家」のモデルという教師理論に基づいて、中国における教育改革の実践のなかで、いかに生かされていくべきかを明らかにすること、を今後の課題にしたいと思う。

主要参考文献:

- ・ドナルド・ショーン著、『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』、ゆみる出版、2001年。
- ・佐藤学著、『教師というアポリア』反省的实践家へ、世織書、1997年。
- ・佐藤学編、『教師像の再構築』、岩波書店、1998年。
- ・佐藤学編、『いま教育を問う』、岩波書店、1998年。
- ・北神正行著、『現代学校経営改革論』—その理念と実践、教育開発研究所、2001年。
- ・秋田喜代美・佐藤学編、『新しい時代の教職入門』、有斐閣(株)、2006年。
- ・佐藤学著、『教師たちの挑戦』、小学館(株式会社)、2003年8月。
- ・佐藤学著、『教育方法学』、岩波書店、1996年。
- ・杉浦美朗著、『デューイにおける探究の研究』、風間書房、1976年。
- ・杉浦宏著、『J デューイ研究』、清水弘文堂、1970年。
- ・秋田喜代美著、「教えるという営み—授業を創る思想過程」、佐藤学編、『教室という場』国土社、1995年。
- ・稲垣忠彦、寺崎昌男、松平信久編、『教師のライフコース=昭和史を教師として生きて』東京大学出版会、1988年。
- ・稲垣忠彦、久富善之編、『日本の教師文化』、東京大学出版会、1994年。
- ・久富善之編、『教師文化の社会的研究』、多賀出版、1988年。
- ・吉崎静夫著、『教師の意思決定過程と授業研究』、ぎょうせい、1989年。
- ・佐藤学著、『学校の挑戦—学びの共同体を創る』、[国境を越えた「学びの共同体」]、小学館(株)、2006年。
- ・《基礎教育カリキュラム綱要(試行)》、教育部、「2001」17号。

- ・《全日制普通高等学校課程計画(試験修正稿)》、教育部、2000年。
- ・高橋勝著、『文化変容のなかの子ども』、東信堂(株)、2002年。
- ・佐伯胖・佐藤学等編、『学校を問う1学校の再生をめざして』、東京大学出版社、1992年。
- ・日本教育方法学会編、『現代の教育課程改革と授業論の探究』の折出健二著「『学びの共同体』論と学習集団論」、図書文化社(株)、2005年。
- ・佐藤学著、『「学び」から逃走する子どもたち』、岩波ブックレット、2000年。
- ・秋田喜代美著、『教育と市場』、教師における「省察」という概念の展開、世織書房、1996年。
- ・杜成憲・添田晴雄著、『都市の小中学校におけるカリキュラム開発の実践と課題』、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2007年。